

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.143

多摩風土記（保谷村東京府へ）

西東京市の旧保谷市市域は上保谷・下保谷・上保谷新田の各村として武蔵国新座郡に属していた。明治二二年には保谷村が成立し、埼玉県新座郡に属した。同二九年には埼玉県北足立郡に編入された。同三八年村長保谷半六ほか一二名が東京府北多摩郡への編入を訴え同四〇年に実現した。登記所や警察署なども隣の田無町にあり便利になった。（健介）



無季俳句考

市川 春蘭

特派員声呑みぬ見れば泣きてゐたる

爆撃機爆弾を孕めり重く飛ぶ

日野草城

日野草城

N月N日、ロシアのウクライナ侵攻がブレーキングニュースとして飛び込んできた。

戦争が廊下の奥に立つてゐた

渡辺白泉

以来、今日も火炮と塹壕による第一次世界大戦のような様態の泥沼の戦争が続いている。人間が塹壕を掘り、手榴弾を投げあっている。ドローンとミサイルが飛び交い、旧式の装備が倉庫から引きずり出され、市民の虐殺が横行している。

灼けし貨車老兵の帽あたらしき

西東三鬼

このような絶対的な悲劇は、季語にとって非日常であり、非日常でなければならぬものだ。人類全体への犯罪である侵略戦争に対し、私たちは決然として表現でもって立ち向かわなければならぬ。俳人である私達にとつて、その表現とは畢竟、俳句であるはずだ。けれど、ふとした瞬間に、私達は俳句に対して切ないような、哀しいような、心細いものを覚えることがある。繰り返す時の中で季語というものはそれ自体で心地がある。春夏秋冬と新年を繰り返して、死に、生まれ、輪廻が円環をなす世界は美しい。それ故に、常態が失われるとき、季語の呼びかける力が弱まることがあることは否定できない（あえて非日常を前に弱まった季語の例を挙げることはしないし、非常態を背景により季語の力が強まるケースも当然あるけれども）。

落日をゆく落日をゆく真赤い中隊

富沢赤黄男

迷彩貨車赤き日出をよぎり過ぎる

三橋敏雄

入営を送り鉄路の野を帰る

山口誓子

季語はどうしても一年一年の繰り返しを前提としていて、その前提から逃れることは困難だ。それに対し「歴史は繰り返す」という言葉はありはするものの、歴史上の事件はある時間に固有のものであり、同じ言葉で容易に語れるほど百回も千回も繰り返したりはしない。その歴史的瞬間にのみ存在する事態を背景に、人の心は自然において繰り返す季節をすら見失う。春の泥濘、雪の進軍も、非日常の前には季節感を伴わぬ季節性の物理的障害だ。

墓の裏に廻る

尾崎放哉

兵隊がゆくまつ黒い汽車に乗り

西東三鬼

いつせいに柱の燃ゆる都かな

三橋敏雄

新型コロナウイルスの流行もまた、無季の事態だといえるだろう。冬には蔓延つても夏には収まる、などという曖昧な期待は無慈悲にも崩れ去り、一年はおろか三年を超えて長々しくも新型コロナウイルスの脅威は続いている。そこに季節はなく、ただ確率的に生じる新型株の出現による再流行のリズムがあるだけだ。インフルエンザのように季節性の風土病と化すだろうという気休めも、現実になるのはいつのことか。専門家は、新型コロナウイルスの弱毒化も風土病化も必ず起きるとは言えないと警告している。ワクチン接種も年一回とはいかず、まるで

季節感を欠いている。

鬼赤く戦争はまだ続くなり

三橋敏雄

砲身に射角あり寒江を渡る

山口誓子

機関銃地二雷管ヲ食ヒ散ラス

西東三鬼

時代の衝撃は無季の形を取って私達の前に立ち現れる。無季の衝撃は常識を瓦解させ、農耕民族的な繰り返しに安んずる心性に否を突きつけてくる。

そんな時、無季俳句は非日常を背景に強い表現となる場合がある。けれども、ならば無季俳句を作ればよいかというと、人も社会も複雑化した現代においてはなかなか簡単ではない。

時代の実体験は強烈な共感を生む。無季的情熱が芸術作品を生むのは、分野を変えればベートーヴェンの《英雄》などにも見られる。後々、献辞を記した表紙を破り捨てたというエピソードもまた、その一過性の熱狂を示すものと言えるだろう。たとえあとから気が変わったとしても、その時の情熱はたしかに芸術作品の中に息づくのだ。それと同様に、特定の歴史的事態は強力に季語の代替を務めうる場合がある。

だが、この非日常的背景の共有が、強力に季語に替わって共感をもたらすという「効果」をあてにして無季俳句の荒野を彷徨つても、現代においては得るものが少ないのではないか。何故ならば、複雑化し、個々人が各々の世界観に耽溺する現代においては、共通した世界の把握の仕方は比較的小さなチャンパーに閉じ込められ、体験に基づいた強力な共感は遠くまで広

がらず、小さな波紋としてだけで終わってしまうからだ。

「大きな物語」の終焉」（ジャン・フランソワ・リオタールは科学についてこの語を用いたのではあるが）は、俳句にとつても他人事ではなく、「世代に共通した体験」という幻想を失った現代において、無季俳句の力は弱まらざるを得ない。

銃後といふ不思議な町を丘で見た

渡辺白泉

俳句の優れた点であつたはずの解釈の余地、空想の余白は、前提となる共通認識を失えば、理解を放散させ、曖昧模糊とした鑑賞しか許さない猛毒ともなってしまう。

オンラインにおいては、SNSで、ブログで、動画配信サイトで、人々は膨大な情報の可能性に触れながらも、レコメンデーションのアルゴリズムのもとでエコーチャンバーに閉じ込められている。翻つて、ネットなど知らないオフラインの世代の半数以上は、オンラインに存在する膨大な表現と情報通信に目隠しをされたまま生きている（総務省令和4年情報通信白書によれば、70歳以上の57・8%がスマートフォンなどを利用してきていない）。いずれも起きていることは同じ、「共通した体験の欠如」。これこそ現代無季俳句が危殆化する理由だ。

情報化された社会で、季節感をもたらずのは年に一度のGAF Aに代表されるIT企業の新製品発表やEコマースサイトの大規模セールだろうか。無季ではないが、無機質の極みではないか。「新興俳句がこんどの戦争をとりあげ得なければ、それは神から見放されたときだ」（山口誓子）、「青年が、無季

派が戦争俳句を作らずして、誰がいったい作るのだ」（西東三鬼）、といった言葉で若者が無季俳句に立ち向かった時代は二度と戻っては来ない。ならばどうしたら良いのか。光り輝くケルト神話の神々が時代を経て矮小な妖精物語として零落していったように、無季俳句は小さなコミュニティでのみ共通理解を得られる寂しい存在へと縮こまっていくのだろうか。

答えは簡単だと思う。言葉を尽くせば良いのだ。無季俳句を投げかける前に一文添えればよいのだ。前書きというごく当たり前の存在が、無季俳句に必要な共通認識を仮想的に取り戻してくれる。現代においても、前書きの後でならば、無季俳句は往年の力強さを復活させるだろう。

現在、多くの俳句コンテストでは、前書きが禁止されている。しかし、特定の理解を前提とした無季俳句の強さを取りこぼすのはもったいない。現代の多様化した事件・時代に対応する無季俳句を現代俳句として支援していくために、前書きを添えた無季俳句をより広く受け入れてゆく。そのような試みもまた、現代の多様性のうちに数え得るのではないか。

さて、今回は一過性（たとえそれが十年以上続く事件であっても）の歴史上のインシデントに対し、無季俳句がどのような役割を果たせるか、どのように語りかける力を持った無季俳句を提示していくべきかについて一考した。引用した句は挿絵のごとくあれと、敢えて説明を廃したこと、また、多くの豊かな議論が可能であろう定形、不定形の問題や、インシデントを背景とした有季俳句の在り方についての考察は含まれていないことを改めてお断りしておく。

あけぼの集

父の日よ馬^ば齡^{れい}重ねて九十年 東久留米 青村 萌生
 どこまでも過去はあるなり蝸牛 八王子 赤野 四羽
 外つ国の歌声のせて花ミモザ 国分寺 秋山ふみ子
 白鳳期のほとけにひとつばたこの花多 摩 足立喜美子
 人の手の降らす火の雨麦は穂に小 平安達 昌代
 空き箱を無心に畳む走り梅雨 清 瀬 穴原 達治
 包丁を研ぐやトマトの試し切り 稲 城 新井 温子
 キャンパスのリモート解除樟若葉 八王子 荒川勢津子
 マーガレット母が教えし花ならば 町 田 有坂 花野
 麦の秋素手の拳は空しくて 国分寺 安西 篤
 使い捨て出来ぬ命や虹二重 足 立 飯田 和子
 母の日や孫居る息子戒める 東久留米 飯田 玉記
 昭和の日遅刻の罰はうさぎとび多 摩 石川 春兎
 青時雨光こぼして鷺の佇つ小 平 石橋いろり
 旅衣青葉に溶けて動きおり 練 馬 石原 俊彦
 聖五月貴方の子よと言えなくて 八王子 市川 春蘭
 風止んで疲れの見える鯉 青 梅 一ノ瀬 順子
 トイレットペーパーくるくる夏立ちぬ 狛 江 伊東 類

真ん中はまとも蚕豆の三兄弟 町 田 稲吉 豊
 街づくり多摩が残せし竹の秋 町 田 今田 述
 梅雨晴間畝をこしらふ農婦かな 町 田 宇賀いせを
 麦秋遙かホリゾンタル 日本海 武蔵野 内田 牧人
 星涼しストローちふと鳴きてより 国分寺 越前 春生
 戢草や防空壕の記憶ふと 武蔵野 江中 真弓
 瘦身を思えり黄泉の渚かな 府 中 大井 恒行
 春の浜まだ濡れ残る波の跡 八王子 大谷みどり
 河骨や愛していると云いなさい 日 野 大槻 正茂
 自画像にハートを足して春隣 立 川 大友 恭子
 雁皮紙の墨の濃淡虎が 雨 川 崎 大西 恵
 伽羅路を好む親父になりにけり 三 鷹 大森 敦夫
 麦秋の大地眠れぬ者の声 昭 島 岡崎たかね
 夏蝶のちよつと挨拶自肅明け 武蔵野 岡崎 万寿
 恋をした夢見て覚めて熱中症 小金井 岡本 久一
 遠雷や大和敷島プラモ 国 三 鷹 小川 葉子
 白椿を彼方へ手向けつ彼岸の日 飯 塚 奥野 亜美
 竜の口手水きらきら夏来る 昭 島 尾関 英正

あけぼの集

人避けて人目を引いて夏マスク 稲 城門野ミキ子
 上向いて足す水平線の遙かな夏 西東京 金谷サダ子
 毀されてまた泥運ぶ夏つばめ 日 野 亀津ひのと
 初孫の産声響き夏来たる 西東京 河 順子
 夢に「兄ちゃん」と白装束立 川川島 一夫
 身のどこか未使用の場はとうに死んだ太 田川名つぎお
 ペットロス部活の夏へ押しやりて 調 布 菅 さだを
 余花みつけ病院帰りゆるむ頬清 瀬 神崎 幸子
 薫風の巨る脳内休耕地小 平城内 明子
 くるくると産衣を脱がす竹の子よ町 田 菊池美智枝
 地虫出づ人はなぜ戦をするの 武蔵野 高坂 栄子
 梅雨晴間ぞろぞろと来て測量士 西東京 幸村 睦子
 キヤベツ切る戦下の人もわたくしも府 中小林 育子
 戦争が始まっている栗の花町 田小山 健介
 燕の子道元 禅師すかす立 川今野 修三
 春田打つ死ぬまでここの春田打つ多 摩 斉田 仁
 戦争に買いだめ利かぬバナナかな 昭 島坂本 空
 南京で何があったのか昭和の日 八王子 櫻本 愚草
 まっ白な靴下揃え聖 五月 東久留米 佐々木克子

無骨な手がまだ生きている麦の秋府 中 笹木 弘
 日々食べるトマトや美人になりたくて 松 山 佐々木 凜
 日を繰ればいつしか余生冷奴調 布 佐藤 茉
 ソバージュになり易き髪梅雨に入る 昭 島 佐藤 光子
 水草のかげより光る鯰の目 八王子 柴 れいこ
 ぶらんこを漕いでも漕いでも僕のまま 杉 並 島 彩可
 梅雨寒の窓辺に一鉢アンスリウム 国分寺 島田 澄子
 本読まぬ人ぎょうさんや梅雨の空足 利 清水 弘一
 薔薇真紅民の血悲しウクライナ小 平 下田 峰雄
 昼も夜も砂糖貨車燃ゆ夾竹桃 西東京 白尾 幸子
 白シャツやそれは核のボタンです 調 布 白戸 麻奈
 掘り出され竹の子太き息を吐く 世田谷 鈴木 浮葉
 塚に立つ祠に添うて八重桜立 川 鈴木かずえ
 万緑の森に消えゆく杖の音小 平 鈴木 寿江
 田水張る映るはこころ風と空 小金井 鈴木 佑子
 前脚に情かかえ込む青蛙町 田 栖村 舞
 駄ピアノ春の旅路の最終日板 橋 諏訪部典子
 マスク取り深呼吸して青葉かな 東村山 瀬尾 恵澄
 囁りや笑ひすぎたる春キャベツ小 平 関 梓

あけぼの集

戦争に届かぬ語彙力牛蛙調 布芹沢 愛子
 預言者の顔で出てくる芒原 武蔵野 高野 公一
 神楽坂 嫗^{おみな} 同志の夏料理 西東京 高原 桐
 要するにまあ要するに薄暑かな 清 瀬 谷村 鯛夢
 悪態がさまにならない牛蛙 国分寺 玉井 豊
 芝生刈り亡父の碗で新茶飲む 稲 城 玉木 康博
 寄り添って五十年未だ基地の夏日 野 玉木 祐
 向日葵にかこまれて晩年に入る大 田 田村 實
 蛙相撲吾子を氣遣ふ一茶あり 三 鷹 田山 光起
 田植え田に片足いまも置きしまま 八王子 辻 升人
 枝豆や無限ループの宴かな 八王子 都筑 遊
 蔵街の軒を袈裟がけ初つばめ 東村山 寺尾 令子
 ローカル線つまづき停る麦の秋立 川 遠山 陽子
 吊革に逞しき腕 更 衣 西東京 戸川 晟
 交番が陽炎に捕まっている杉 並 飛永百合子
 絶望のかたちに春の虹かかる 清 瀬 永井 潮
 池の面に皺波立てり蟬しぐれ町 田 長澤 義雄
 麦の穂の波輝けど戦地かな小 平 中條 啓子
 引力のありて砲弾青林檎 西東京 中田とも子

老いにブレイキ青葉時雨のステイキ館国 立 中野 淑子
 明易し鶏抱いて連れ帰る府 中 中矢 温
 華やかに別れてひとり花疲れ座 間 長野 保代
 花さびた神居古潭の風の色 武蔵野 夏目 重美
 雲に挿す課外授業の田植かな町 田 成戸 寿彦
 紫陽花の色づき初めて今朝の雨 世田谷 西前 千恵
 春深く夏王朝などを思いけり 昭 島 西村 智治
 春燈し独りの部屋の一つの灯多 摩 拔山 裕子
 万緑の中に瞑想平和像 三 鷹 根岸 敏三
 囀やさへづる森のなきキウウ 三 鷹 根岸 操
 メーデーを知らぬ若者も居て五月小 平 野口 佐稔
 雉去りて彩り残る機の里 八王子 野澤 勝美
 老斑をみせ片栗の胸反らす青 梅 萩原 美沙
 駆け込み寺探しあぐねて濃紫陽花 武蔵野 蓮見 順子
 綿菓子や少年いつか大志抱く 武蔵野 蓮見 徳郎
 戦争は嫌い飛行機も嫌い秋の雲羽 村 花貫 寥
 ひと雨の流れて音のなき暑さ日 野 日野 百草
 柿若葉シルバークートよく迂る多 摩 平山 道子
 薔薇の大輪熊蜂のものである 八王子 広井 和之

あけぼの集

味噌蔵に和綴ち家計簿昭和の日調 布藤原はる美
 焦土のざらしの人形の目に夏の雲練 馬淵田 芥門
 今年も妣が先に来ていた夕桜羽 村堀部 節子
 逆上がり出来すずしげな貌となる羽 村堀部 嘉雄
 沈黙の夕焼雑踏に裏返す国 立前田 弘
 かたばみのあの道に続くこの道国 立前田 光枝
 家庭訪問猫も座に着く畏^{かしこ}みて木更津松本 まり
 聞き流す息子の小言茄子の花 八王子 松元 峯子
 薔薇満開庭でいただくローズティー 東久留米 三池 泉
 緑蔭のベンチのふたり端と端 東久留米 三池しみず
 木の芽時友は伴侶に先立たる 東久留米 三浦 禎三
 散骨の故郷の島青葉潮 小金井 三浦 土火
 七十七歳菜の花摘んでいる途中 世田谷 三浦 文子
 五度^{なな}転居して五十年たんぽぽ 町田 三木 冬子
 共に老い河鹿蛙の話など 国分寺 水落 清子
 擦れ違ふ山車の囃子は音を抑へ三 鷹水野 星闇
 稚魚数多波立て進む五月かな 日野 満田 光生
 あじさいの青色が好き空が好き 昭島 宮腰 秀子
 昼寝覚めの母置き去りにされた顔調 布宮崎 斗士

柏餅どこか硬派の息づかひ 国分寺 武藤 幹
 親友^{とも}逝きぬ取り残されし余花の雨 小金井 村井 一枝
 目が合っただけで金魚に嫌われる熱 海望月 哲土
 調弦のしずけさにあり青葉光三 鷹守谷 茂泰
 何もせずただ仰ぎたる山法師町 田山崎せつ子
 夏霧や死にたくもなし生きたくもなき 東村山 山崎美紗緒
 斜め咲きいつしか迷い鉄線花府 中山本 徳子
 ゆりの木の花はゆらりと天を向き 八王子 山本ひまわり
 移築さる夏山水の箱根宿多 摩山本みつし
 紫陽花の藍の孤独や長き雨調 布豊 宣光
 不眠症鉢の金魚に及びけり 稲城 好井 由江
 ト音記号描くごとくに春野行く 三鷹 吉川 真実
 流木に跨る女三鬼の忌府 中吉澤 利枝
 足痛め雀の駈け足青葉風 東大和 吉田雄飛子
 映像の侵略者がいる夏座敷 東久留米 吉平たもつ
 冷酒酌む父の知らざる齡生き 国立 吉村春風子
 夏空の見えぬ爆撃慟哭す日 野依田しず子
 年寄が労られゐてこどもの日立 川米澤 久子
 夕端居戦争中とは話し出す青 梅渡部 洋一

青木 一郎
草の餅土手の匂ひも母の背も

水落 清子

季語の草の餅で蓬の葉を掲ぎ込んだ餅に
館を入れた草餅が想像できる。そして中七
下五の「土手の匂ひも母の背も」で、緑草
で覆われている近くの土手に蓬を摘みに、
そして草餅作りにも母に背負われて行われ
た過去の思い出がうまく描写されている。

赤羽 四羽

文明の夜の部分に梅香る

守谷 茂泰

文明には昼の部分があれば、夜の部分も
ある。往々にして夜の部分は隠され、また
見て見ぬふりをされる。そんな闇にふと香
る梅の花の甘さは、警告なのか、あるいは
悪の誘惑なのだろうか。

足立喜美子

春寒し夫亡き世を生くるとは

江中 真弓

「夫を呼ぶ秋虹のまた濃くなれば」(『六
根』)。この上掲句を詠まれた頃はお元氣そ
のもの。が、作者の長い俳句人生を温かく
見守って来られた御主人が亡くなられた。
何時かは来る別れとはいうものの、「夫亡
き世を生く」とは」の措辞に胸を突かれる。

穴原 達治

風花やゆつくり知らぬ町になる

佐藤 光子

風花は冬の晴れた日などに、舞い散る雪
の切片である。人が集まり暮らす「町」は
時代とともに変化するもの。東京では転入
よりも転出が多くなったという。時の流れ
と人の世はまさに変幻万化、時の移ろいは
儚い。

新井 温子

菜の花の黄にうばわれている時間

山崎せつ子

この句が目にとまり頭からはなれない。
作者の気持がとてよく分るからである。
以前、ポーランドを旅行した時に、一面
の菜の花に目をうばわれた。その時の拙句
いちまいの菜の花畑地平線 温子
又あの光景を思い出させていただき感謝。

荒川勢津子

菜の花の黄にうばわれている時間

山崎せつ子

鮮やかな黄色の絨毯のように野に群生し
ている菜の花。司馬遼太郎はじめ多くの文
学者が菜の花を作品の中に書いている。
在来種「アブラナ」は弥生時代に中国か
ら渡来したといわれています。
菜の花に心を奪われ幸せなひととき。

飯田 六斗

田一枚鋤込みを待つ蓮華草

水野 星閣

楽しみ乍らの農作業風景を想像した。鋤
の柄に両手をのせ、蓮華草が咲きはこる田
一枚、農に携わる方の色んな思いが伝わっ
てきた。この方が作る米はさぞや美味しい
だろう。蓮華草も鋤込みを早くと待ってい
る声が聴こえてきた。

一関なつみ

天辺の一個は月となる榎櫃

宮腰 秀子

「榎櫃の実」は黄色く熟し、じんわりと
甘い香りを発する。楕円形の印象が強く、
掲句の「月となる」には大胆な面白さがあっ
た。子どもの頃、地面に落ちた榎櫃の実を
触った際の、月のクレイターを想像する凸
凹の質感を思い出した一句。

飯田 玉記

鯨尺捨てず使わず木の芽風

門野ミキ子

母から和裁を鯨尺で習ってより、使わな
いまま、芽吹く季節を七十回も送りつつ筆
筒に入れられている物差し。このお句は私
の心境そのものでして、こんなに上手に表
現できるなんて感動です。

一ノ瀬順子

春寒し夫亡き世を生くるとは

江中 真弓

いつかは来る伴侶との永遠の別れ。作者の嘆きの一端が窺える。この作品に十数年前の自分の姿が重なった。胸に棲む人といつも通りの会話をし、日々を過していつてほしい。「日にち葉」が効いて来る日もやがて来るであろうから。

伊東 類

辿りついた齢なのに戦か二月尽

川島 一夫

平和を願ってこれまで頑張ってきたのに、そこに待っていたのが戦争とは憤りと共に悲しすぎる現実である。国の内外内容問わずどこにでも戦はある。二月も終わり、希望が待ち受ける春三月であつて欲しい。作者の二月尽に込める気持ちが痛ましい。

稲見 寛子

聴覚に届く気配を雪解水

穴原 達治

雪解水のかすかな音が聞えるのは春の訪れの知らせで、心うれしいものだ。水音がかすかに聴覚にひびいたというのだ。集音器を買った。来年こそ、これを上手に使いこなし、いちちやく春の訪れをかみしめたい、そう思っている。

今田 述

兄貴より次男は気楽囃りぬ

渡部 洋一

私も次男で同じ境遇。違うのは兄は東北大を出て医師となり伊達藩士末裔の女と結婚し家督を継がず、私は当時銀行の海外駐在で身動き取れず。結局末弟が東京の家を貰い両親を看取った。九十歳を越え、未だに公募展に画を出品できている所以だ。

内田 牧人

片栗や明日また開く花たため

堀部 嘉雄

新興俳句の台頭で現代は作者の思い「心象」を強く述べる句が多くなったが、有季定型が柱なのは不変である。掲句は囁目と心象のバランスが良いと思った。囁目を「や」切れにし後半に心象を含ませた表現は巧み。読者が想像を拡げて貰えるのが嬉しい。

大井 恒行

ジェンダーや少年そつと初鏡

武藤 幹

作られた男らしさ、あるいは女らしさ。少年と言えは稲垣足穂を思い起こすが、ならば初鏡（季語の意としては、新年に女子が化粧すること）もあるうか。世はジェンダー論のかまびすしさ、批評を宿した諧謔の句。

大槻 正茂

番号札5番でお待ちの方春です

宮崎 斗士

フードコートで料理が出来た時のアナウンスですが、下四の「春です」でびっくり。頼んだのが「春」だったのですね。待ちに待った春がやつと来るのです。ユーモアたっぷり、軽いけどあたたかみを感じさせてくれる楽しい句です。

大渡ルリ子

眠れない春満月が重すぎて

中條 啓子

春の夜の大気中には水分が多いのと、月も大気中の水分や塵のために輪郭がぼやけ滲んだように潤んで大きく重たそうに見えますね。春満月が重すぎて眠れないお気持よく解ります。私も昔春満月に見て眠れなかった事がありました。

岡本 久一

日曜日蝶が目覚める兵が死ぬ

小山 健介

いま死にゆく青年兵の指先に蝶がとまる。「西部戦線異状なし」たしかそういう名の映画のシーンを彷彿とさせる一句だ。戦時（絶望）と平和（希望）を象徴して見事。だが現実の戦争は、ウクライナに、ミャンマーに……。

亀津ひのとり

車椅子畳む八十八夜かな

飯田 玉記

状況はいろいろ推察されますが、闘病生活、或いはリハビリの日々がようやく終わり世話になった車椅子を畳む。気がつけば早や夏を迎える美しい季節。時の経過と無事に日常生活に戻る作者の喜びが、八十八夜の季語に托されているように思います。

河 順子

テレワーク都忘れを活けてから

蓮見 徳郎

テレワークする方の工夫の一端が伺われます。庭に咲いていたのか、小さな紫色の都忘れを数本手折り、手近な花瓶に活けてみる。花を眺め、心が次第に落ち着いて来て、パソコンを置いた机の前に、静かに腰を下ろす。俳句を作る方らしいセンスです。

城内 明子

菜の花の黄にうばわれている時間

山崎せつ子

視野に溢れる菜の花の群生の中に佇んでいるのでしょうか。コロナ禍、ウクライナを始め諸所の戦禍は世界の経済・食糧危機にまで及ぶ昨今。否応なく荒ぶ心情は、無心に風に揺らぐ菜の花の黄に静かに解されてゆくのでしょうか。

島 彩可

立春やいつもの野道旅として

野口 佐稔

立春を迎え、心新たに野道を行く作者。旅としてゆけば足どりも軽いくつもの景色も新鮮に映ることだろう。コロナ禍で旅もままならず塞ぎがちな昨今、ありきたりな日々も心持ち次第で生き生きと過ごすことができるということを教えていただいた。

清水万ゆ子

啓蟄のゆつくりまわす万華鏡

堀部 節子

子供たちが巣立つてもう久しい。それぞれが家を出るとき、玩具と名の付くものは殆ど棄てた。しかしその中で今以て私の手元にあるものに、万華鏡がある。虫達が冬眠から覚めた、早春の明るい光の中で、作者にとって万華鏡は青春そのものかも。

白尾 幸子

蟬時雨には十匹ほど足りぬ

高野 公一

裏の丘陵はいつぱいの蟬時雨で丘が動き出しそうである。そのうち、こちらでもセミがしきりに夏を食べてくれるだろう。

鈴木 佑子

薄氷の解けて自由な水となり

笹木 弘

川の水がとけて流れていく。寒さで硬直していたのが春の到来で解き放たれていく自然。人間もそうだと思う。その早春の一時を「自由な水となり」と表現している。「自由」よく使われる言葉だが、この句の「自由」は斬新ですばらしい。

栖村 舞

云い回す文ある言葉暖かし

河井 時子

婉曲のように見せかけてぬけぬけと自分の思いを遂げようとするアイツの魂胆が見える。それを暖かいと錯覚させるアイツの手口は巧妙だ。ネエ、いい加減やめてよ、ワタシの中に巣食っているアンタ、ワタシの言葉を返して。

寺尾 令子

如月や猫の薄目がまた閉ちて

稲吉 豊

二月は冬の続きの寒い月。猫は寒さに聡く日溜りをみつけてよく眠る。眠っている猫に声をかけると、うす目をするも、たいした用もないとすると又目を閉じる。この一句より作者の猫への愛情、観察眼の鋭さに感激しました。

中野 淑子

張る意地に寂しさ透けり久女の忌

藤原はる美

上五中七に久女その人の半生が網羅されており、久女作品から推測して、「寂しさ透けり」が晩年の姿と重なり彷彿とする。墓は曾ての住居の近くにあつて、ひっそりと山百合が咲く寂しい所だったことを思い共鳴していただいた。

野澤 勝美

峡の田や木の実を乗せて薄氷

荒川勢津子

谷川からの取水を利用する稲田を取上げ、春到来を機に水面の木の実が、春先の寒の戻りに出会い、薄氷に支えられ登場する様子が描写されている。木の実と薄氷の限定された素材をもって、微妙な自然の態様変化が稲作の局面で的確に表現されています。

花貫 寥

日曜日蝶が目覚める兵が死ぬ

小山 健介

日曜日でなくとも自然界の法則で蝶の生育が見られるのだが。
すでに人間としての理智を失った戦争が、世界のどこかで悲惨な戦争が起っている。自然と現実のアンバランスを作者は鋭く書いている。

堀部 節子

さくらちるさくらちる鎮痛剤をもつと

遠山 陽子

街は桜の季節で高階の病窓にもはなびらのひとひらひとひらが触れてゆく。その花びらに入院中の作者が鎮痛剤をもつと。と告げている。ドラマの一シーンのようであるが現実である。作者の作句魂に触れた思である。素晴らしい一句である。

前田 弘

雪しまく訛はパンの柔らかさ

三浦 文子

東京という洗練された大都会。柔らかに流れるような言葉を想像する。しかし、東京は田舎もんの掃きだめ。誰もが故郷の訛りを大切に抱えている。雪がしまくともその訛りはパンのように柔らかい。

松本 まり

ありつたけの卵を茹でる春寒し

鈴木 浮葉

以前は食べすぎるとコレステロール値が上がるというわれ悪者扱いだった卵は、最近はおやつの出世頭。お医者さんが、おやつにいつでも食べられる様に茹でて置くそうです。三コは大丈夫みたい。手近に置いて、卵サンドやサラダに重宝します。

三池 泉

辿りついた齢なのに戦か二月尽

川島 一夫

ようやく辿りついたこの年令。平和であるべき世界にまた戦争か、と溜息まじりの二月尽。早くもいま五月が来て、まだ多くの犠牲があるのに終結しない。アメリカもロシアの戦力が低下するのを待っている。恐ろしい戦争を体験した私は終息を祈る。

三浦 楨三

今を生きる老木達の芽吹きかな

石原 俊彦

中国の「陰陽五行説」によれば人生は四つの時期「青春」「朱夏」「白秋」「玄冬」だそうです。私も「玄冬」を楽しむ一人ですが大木が好きでよく訪ねます。その芽吹く時、傍に立てば氣力を与えてくれる。よく分かります。

三浦 文子

辿りついた齢なのに戦か二月尽

川島 一夫

尋ね求めながら、苦勞しながら重ねてきた年齢。辿りついてみれば、世界はロシアによるウクライナの軍事侵攻が始まり、出口が見えない状況に。どうして人は、世界は戦いを止めることが出来ないのか。深い絶望と哀しみに襲われるばかりである。

三木 冬子

番号札5番でお待ちの方春です

宮崎 斗士

先ず、銀行、郵便局、病院、フードコートなどで番号札を渡され順番を待つ場面を想像します。5番というのが絶妙。長く待たされるのは誰しもいらいらするもの。「春」が効果的で心のゆとりが感じられる。咄嗟にこの様な発想が浮かぶ詩人に乾杯。

水野 星闇

春立つや崖^{はけ}の空から妻の声

満田 光生

寒さが退いて暖かさが肌に感じられるようになって来ると、自然と人恋しくなるもの。俳句を通して出逢われた奥様は、すでに他界された由。国分寺崖線の上空には、いつまでもお二人の思い出が揺蕩っているでしょう。胸に迫る妻恋の句であります。

満田 光生

校舍からシンバル響く蝌蚪の紐

大槻 正茂

農村部の小学校。近隣の水田や溜池には蛙の卵が……。合奏ではなく、個人練習が楽器で遊んでいるか。過疎と少子化で学校の統廃合が進むが、元気な子供の様子が想像される。もうすぐお玉杓子も活発に泳ぎ出す。農村の「元氣」が感じられる句だ。

望月 哲士

ふらここの鉄の匂いと居てひとり

城内 明子

誰しも孤独感に囚われている時は五感が鋭敏になって、普段は気の付かなかった音や匂いなどを感じるようになるので、ふらここに匂いを感じたことで孤独感の深さがよく伝わり、志村喬を思い起こしてしまふが、作者はどんな歌を口遊んだのであろう。

山崎せつ子

窓越しに猫と見てゐる春の雪

米澤 久子

私の場合は、猫ではなくて犬だが、窓から外を伺う様子が目に浮かぶ。雨と違って、雪の場合は思わず見入ってしまう。ましてや春の雪である。そんなに深刻ではない。やわらかな様子が想像できる。

山崎美紗緒

いずかたも水に音あり寒の明け

寺尾 令子

上五中七にかけて寒明けの情景が広がる。こと更感じなかった水の音が、寒明けが近いための胸に響く。「水に音あり」当然のことでありながら焦点を当てることによって、寒明けの情趣が読み手の胸にしみ込んでくる。

山本 徳子

紅梅や小さき家を売る話

根岸 操

人生には転機が付きものと云える。梅の木あつてのこの家。小さき家より大きく見える紅梅であろう。何とも心残りでありましよう、共鳴句である。かつての私の在所の想い出が深い。

山本みつし

背中まで無口な夫と花野中

山崎美紗緒

「男の背中」という語句がある。「背中で無口な夫」とは、どのような男性か、一匹狼の古武士を感じる。しかし、「花野中」が夫婦の日常生活を彷彿させ、見事である。昨今、こういう情景が、少なくなりました。微笑ましい限り。

豊 宣光

刑終えた人となつまずく桜道

小林 育子

刑期を終えて出所した人を迎えた家族、もしくは知人・友人の方が詠んだ句でしょう。出所した人は久しぶりに外に出てきたので、歩くのに慣れていません。桜に見とれているうちにつまづいてしまったのです。二人の人生が見えてくるようです。

吉澤 利枝

さくらちるさくらちる鎮痛剤をもつと

遠山 陽子

「さくらちる」のリフレインが「鎮痛剤をもつと」にかゝり、その痛みへの激しさを知る。私自身が股関節の手術をしたばかりでその手術後の痛みと苦しさを知っている、この「もつと」に心打たれる。

米澤 久子

雪しまく詠はパンの柔らかさ

三浦 文子

方言は解釈に首をひねる事多々ですが、ほんわかとした趣があります。猛吹雪に耐えて生活する東北人の強さの深さが、この句に滲み出ています。「詠はパンの柔らかさ」この漢字の表示が優しくて最高の措辞と思います。好きな一句になりました。

渡部 洋一

龍の玉来世も妻と言われたさ

萩原 美紗

作者は御主人を亡くされ、独り暮らしのこと。この句から、生前は御主人との仲の良い生活が伺われる。しかし、今でも自分は良き妻であつただろうか、振り返っている。大丈夫、美紗さんならどこへ行ってもすばらしい妻になれますよ。

あけぼの便り

○『現代俳句』で一年間、時評を書いていきます。第一回の4月号は「橋を架けるひと、池田澄子」、第二回の5月号は「俳句と21世紀の戦争」でした。ストロングスタイルなので、ぜひよろしく願います。

(赤野四羽)

○冬木喬様、前号で私の句を取り上げて下さり有難うございました。これを励みにいたします。編集部の皆様にはご苦勞様です。感謝申し上げます。(荒川勢津子)

(一ノ瀬順子)

○暦どおり暑くなつて参りました。有坂様、辻様、前号で拙句をご鑑賞いただきありがとうございます。(大森敦夫)

(奥野亜美)

○この日以来、情報社会を離脱し、精神の涵養を計っています。安定剤は、『アフリカ』(民族音楽・全10曲CD版)を聞くことです。

○前号で拙句を取り上げて頂いた成戸寿彦様、田山光起様、思わぬ共感をいただきありがとうございます。二重の骨折をされた由、田山様、早期の恢復をお祈りします。(亀津ひのとり)

○前号の「俳句にながでできるか」日野百草君の文、時々、かく経た俳人と俳句史の流れをなぞるドキュメンタリーもいい企画。書く方向もなかなか読ませることに腰を据えて身になる書き方だ。コンパクトにまとまったいい文章だった。今後も期待大。(川名つぎお)

○鈴木浮葉様、前号で「糞虫や」の拙句を取り上げて下さりありがとうございます。俳句も人生も悩みながらですが、励みになりました。(小林育子)

○さわやかな五月の空にこいのぼりが泳いでいます。この空の遠く離れた地球では戦、そしてまだコロナ禍も……。一日も早く平和な世界が戻るよう祈るばかりです。(佐々木克子)

○櫻本愚草様、前号で拙句をお取り上げ下さりありがとうございます。また、世界中が平和な世の中になりますようお願いしております。(柴れいこ)

○足利市の博物館創設の運動が徐々に軌道に乗り、6月に第一回の総会を開きました。足利市にとって世紀の大事業計画です。(清水弘一)

○何事もない平穏無事な日常がどれ程大切か身をもつて感じています。新緑の美し

さに力をもらっています。(飛永百合子)

○「あけぼの便り」では、みなさんと対話をしているように、大変楽しく読ませていただいています。(長澤義雄)

○いつもお世話になっております。令和四年度の陽春俳句会の折は、入賞させて頂き過分の図書券を頂いて恐縮しております。有難うございました。(長野保代)

○青村萌生様、拙句「エンディングノートは白紙年惜しむ」をご鑑賞下さりありがとうございます。[あと三つ足せば白寿]の方のお言葉として「戸惑うのが人情」に納得致しました。ようやく傘寿すぎたばかりですので、先輩を見習い作句に励みたいと思います。(成戸寿彦)

○コロナも少しは落ち着いたのか、気にならなくなったのか、気兼ねしつつも出かけられホッとしています。(西前千恵)

○ようやく俳句研究会も再開されました。毎月楽しみにしています。(根岸敏三)

○村井一枝様、拙句「じんじんと傷む天地や雁の列」をご鑑賞いただきありがとうございます。「多摩のあけぼの」の一句鑑賞を読むこともとても勉強になっています。研究会に出席していただければなおさら嬉しいですね。(根岸操)

○蓮見順子様、前号で拙句「小鳥来るいつ

もの柿の木伐りました」をお取り上げくださりありがとうございます。柿の木がなくなつて、紫陽花が元気に勢力を拡大しています。(野口佐稔)

○日野百草氏の「俳句になにができるか」を読み非常に感動しました。私の世代は戦争を経験し、学生運動や基地闘争で燃えた時期もありました。その時代を語れる人たちも古い、どんないなくなっています。「俳句で人間を、社会を詠む」これが私たちに課せられた役目なのだと改めて思いました。(藤原はる美)

○編集部一同様に感謝申し上げます。コロナ禍も緊張しながら日常に戻りつつあります。ロシアのプーチン大統領の入院手術という一報に考えさせられました。世界がどうぞ安寧でありますように、安心した毎日を祈っております。(松本まり)

○相変わらず巣籠りを決めこんでいる今日此の頃ですが、庭木の若葉みどりの勢いに元気をもらい、薔薇のアーチをよろこんでいます。(三木冬子)

○編集部の皆様ありがとうございます。終息の見えぬコロナ、ロシアのウクライナ侵攻と心の痛む毎日ですが、俳句に親しんできた者としては、小さな希望と勇気を今日もありがとう、です。(水落清子)

○退職して出勤のない日々となりました。多忙を理由に打つ遣つてきたことの多さを今更ながら痛感します。思い通りに事は進みませんが、一つ一つ片づけていくしかなさそうです。(満田光生)

○このところ色々な句会が「通信句会」から「生句会」へ！二年半振り。やつと顔と顔を合わせたの選句、選評…。やはり、こうでなくては…。このまま普通が続きますように!!(武藤幹)

○お世話になります。天候が安定しない日々が続いている最近、皆様、お体に気を付けてお過ごしください。(村井一枝)

○詩心がいまだ冬眠したままで困っております。(山崎美紗緒)

○皆様の丁寧な一句鑑賞は大変勉強になっております。選んで頂けることは大きな励みになっております。ほんとうにありがとうございます。(好井由江)

○コロナ感染者がここに来て少しずつですが減ってきて、このまま収束へ向かうことを願うばかりです。万緑の季節に心弾みますが季節の変わり目、御自愛ください。(吉川真美)

○コロナ禍の中、足を悪くして入院手術と大変でした。この頃やつと杖をつきながら歩けるようになりました。(吉澤利枝)

令和四年度

定時総会

令和四年四月九日(土)
於・武蔵野スイングホール

花も山桜へと季節が移り行く暖かな日、令和四年度定時総会と陽春句会が開催されました。新型コロナウイルス禍が長引き対面での開催は三年ぶり、大森敦夫事務局長の司会により、会歌「多摩のあけぼの」を斉唱し満田光生幹事の開会の言葉で開会されました。

ご来賓に東京都区協・山本敏倅会長、神奈川県協・尾崎竹詩会長、千葉県協・並木邑人会長のご臨席を賜りまして出席者は27名でした。当日は吉村春風子会長のご都合で代わりに永井潮副会長が主催者挨拶を致しました。続いてご来賓各位から温かい祝辞を頂きました。

コロナ禍に加え、ウクライナ戦争など世情騒がしい折、各地区協とも周年行事に影響が及んでいる話題、それでもこのピンチをチャンスに変えてメッセー지를乗せた普遍性のある俳句を楽しみたいとの言葉が印象に残りました。

議長に戸川晟氏、副議長に前田光枝氏を選出し議事に入りました。

一、令和三年度事業報告

二、令和三年度収支報告

及び会計監査報告

三、令和四年度事業計画案

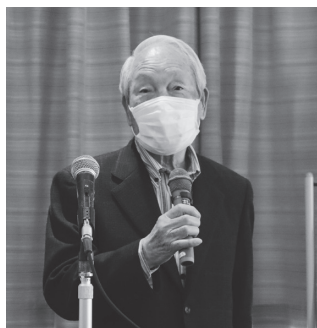
四、令和四年度収支予算案

以上右の議案が審議され、原案通り、承認、可決されました。監査役の水野星閣本部署務局長は会員数がかつてより半減しており、地区活動を通して新会員を増やしたいと言及されました。

次に退任の稲吉豊前事務局長にその労をねぎらい花束を贈呈致しました。休憩後、陽春句会に入りました。今回の投句者は43名、特別選者24名による選の披露、成績発表が行われました。上位5名の入賞と特別選者からの特選賞が入賞者に手渡されました。

その後、例年は同じ会場での懇親会が開催されましたが、今回はそれが叶わず、非常に残念な事でした。来年は親しく言葉を交わせる場が実現出来る事を願って、山崎せつ子副会長の挨拶で閉会致しました。

(関 梓記)



総会永井副会長挨拶



戸川議長(右)と前田副議長



退任の稲吉氏に根岸操部長より花束



左から来賓の山本都区、並木千葉、尾崎神奈川、各地区協会長

2021年度（令和3年度） 収支決算報告書

1. 収支状況（令和3年1月1日～令和3年12月31日）

		前年度実績	予 算	実 績
収入	本部助成金	391,200	400,000	356,400
	地区会費	94,000	100,000	88,000
	事業収入	208,680	570,000	225,000
	雑収入・寄付	110	1,000	1,008
	計	693,990	1,071,000	670,408
支出	事務費	8,979	10,000	9,309
	通信費	42,578	40,000	51,318
	印刷費	0	20,000	34,650
	会報費	529,297	530,000	499,689
	会場費	0	5,000	0
	交通補助費	17,000	25,000	22,500
	交際費	17,063	10,000	23,936
	事業費	249,797	382,000	277,387
	会議費	36,205	0	0
	雑費	2,780	3,100	3,100
	計	903,699	1,055,000	921,889
（*）収支差額		△ 209,709	16,000	△ 251,481

（*）前期末資金残1,009,685円（下記2.）に、当期収支差額実績（△251,481円）を加えたものが、当期末資金残758,204円）である。

（備考）当期事業費の収支状況

事業項目	収 入	支 出	収 支
総 会	0	15,084	△ 15,084
俳句大会	209,500	253,110	△ 43,610
吟行会	0	5,463	△ 5,463
研究会	15,500	3,730	11,770
協会賞なし	0	0	0
計	225,000	277,387	△ 52,387

2. 資金状況

現金預金内訳	前期末	当期末	増 減
手元現金残高	17,995	8,892	△ 9,103
普通預金残高	991,690	749,312	△ 242,378
定期預金残高	0	0	0
合 計	1,009,685	758,204	△ 251,481

2022年 俳句研究会及び行事案内

◆俳句研究会	開催地
第1回 令和4年 1月22日（土）中止	立川（子）
第2回 2月26日（土）中止	立川（子）
第3回 3月26日（土）幹事会	立川（子）
第4回 4月23日（土）幹事会	立川（子）
第5回 5月28日（土）	立川（子）
第6回 6月25日（土）	立川（子）
第7回 7月23日（土）	立川（子）
第8回 8月27日（土）	立川（子）
第9回 9月24日（土）	立川（子）
第10回 10月15日（土）幹事会	立川（子）
第11回 11月26日（土）	立川（子）
第12回 12月17日（土）	立川（子）

午後1時より講師による講話の後句会、合評
開催地の（子）は、立川市子ども未来センター

◆主な行事		
初夏の吟行会 はけの道・滄浪泉園 6月11日（土） 句会場 小金井市萌え木ホール		武蔵 小金井
秋の吟行会 府中市郷土の森 10月1日（土） 句会場 府中市郷土の森博物館		府中
俳句大会 第40回 11月5日（土）武蔵野スイングホール		武蔵境
◆会報「多摩のあけぼの」編集発行		
令和4年（1月 4月 7月 10月） 各月の28日頃発送予定		

令和4年 陽春句会 作品集

〈入賞五句〉

雛あられ手に乗るほどの幸でよい
 春灯や指が旅する地図の上
 鉛筆にかすかな木の香日脚伸ぶ
 春の雪むかしと昔すれちがふ
 戦車ごと包んで飛ばせシャボン玉

吉村春風子
 長野 保代
 飛永百合子
 水落 清子
 石橋いろり

○

陽炎に手足を付ける振付師
 弾く人と行く人春の駅ピアノ
 前の世も次の世もなく雪こんこ
 花嫁を待つている庭花辛夷
 囀や人は言葉を紙の上に
 手づくりのひひなと語る母の古い
 空つぽの体育館に花吹雪
 雪しづりつぐらの主の耳びくり
 公園を横切る日課仏の座
 水底の起伏も楽し蜷のみち
 鯉跳ねて玉川上水風光る
 かたゆき・あわゆき・ざらめゆき あそほ
 蠶れり土産物屋の早仕舞
 万愚節知りながら買ふ海賊版
 路味噲に夫婦の会話はすみたり

山本 敏倅
 玉木 康博
 高野 公一
 尾崎 竹詩
 根岸 操
 夏目 重美
 大森 敦夫
 三浦 土火
 前田 光枝
 秋山ふみ子
 野口 佐稔
 佐々木克子
 蓮見 徳郎
 稲吉 豊
 根岸 敏三

自分史は令和で終わる春の雪
 鷹鳩と化し投手の初恋
 式神を箒で払う女正月
 問われても答えられない枇杷の花
 原点は五歳の記憶沈丁花
 線路脇這うケールに春光る
 春の雪解けて花壇のみずみずし
 茶碗蒸し三葉芹から箸をつけ
 求愛をどう断ろうヒヤシンス
 世界中が平和な春を待っている
 心底の底が抜けちゃい四月馬鹿
 桜繁る中より初音たどたどし
 冬桜過去を笑顔で振りかえる
 春爛漫四月生れを讃うべし
 ああ言えばこう言う孫の新社員
 朝あかね一歩一歩の霜の音
 健歩なり迷わず路の臺またぐ
 風柔らいっししか梅の赤と白
 春夕焼八木重吉の詩碑がある
 鳥帰る故国シベリア無事なれや
 風の白梅旅団は急ぐウクライナ
 啓蟄や白々しげに恋をして
 春水四沢光る草ぐさ生ひ満ちて

永井 潮
 満田 光生
 並木 邑人
 宮腰 秀子
 関 梓
 石原 俊彦
 鈴木 寿江
 白戸 麻奈
 望月 哲士
 戸川 晟
 前田 弘
 山本ひまわり
 松元 峯子
 渡部 洋一
 飯田 玉記
 大友 恭子
 清水 弘一
 山崎せつ子
 有坂 花野
 安西 篤
 大井 恒行
 三池 泉
 水野 星閣

〈句会選者の特選句〉

山本 敏倅 選
 春の雪むかしと昔すれちがふ
 尾崎 竹詩 選
 春の雪むかしと昔すれちがふ
 並木 邑人 選
 陽炎に手足を付ける振付師
 安西 篤 選
 手づくりのひひなと語る母の古い
 前田 弘 選
 金谷サダ子 選
 陽炎に手足を付ける振付師
 遠山 陽子 選
 鉛筆にかすかな木の香日脚伸ぶ
 冬木 喬 選
 三池 泉 選
 囀や人は言葉を紙の上に
 三浦 土火 選
 春灯や指が旅する地図の上
 江中 真弓 選
 蠶れり土産物屋の早仕舞
 高野 公一 選
 春の雪むかしと昔すれちがふ

水落 清子
 水落 清子
 水落 清子
 山本 敏倅
 夏目 重美
 佐々木克子
 山本 敏倅
 飛永百合子
 飛永百合子
 飛永百合子
 根岸 操
 長野 保代
 蓮見 徳郎
 水落 清子

吉村春風子 選

手づくりのひひなと語る母の老い 夏目 重美

根岸 敏三 選

空つばの体育館に花吹雪 大森 敦夫

永井 潮 選

噂や人は言葉を紙の上に 根岸 操

山崎せつ子 選

桎梏の中より初音たどどし 山本ひまわり

戸川 晟 選

戦車ごと包んで飛ばせシャボン玉 石橋いろり

小山 健介 選

春の雪むかしと昔すれちがふ 水落 清子

大友 恭子 選

前の世も次の世もなく雪こんこ 高野 公一

根岸 操 選

鉛筆にかすかな木の香日脚伸ぶ 飛永百合子

蓮見 徳郎 選

弾く人と行く人春の駅ピアノ 玉木 康博

水野 星闇 選

かたゆき・あわゆき・ざつめゆき あそぼ 佐々木克子

佐々木克子 選

雛あられ手に乗るほどの幸でよい 吉村春風子

石橋いろり 選

雛あられ手に乗るほどの幸でよい 吉村春風子

大森 敦夫 選

雛あられ手に乗るほどの幸でよい 吉村春風子

沢田改司さんご逝去

陽春句会第3位入賞の飛永さん。(左) 1、2位の方は欠席でした。



当会の前顧問、沢田改司さんが7月9日九十六歳でお亡くなりになりました。氏は当会の設立からご尽力され、幹事長、会長を歴任された後も長きにわたりご指導を頂きました。また、当会独自の会歌「多摩のあけぼの」の作詞を担当され(作曲は宮川としを氏)今も歌い継がれています。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

遠山陽子さん「詩歌文学館賞」受賞

第三十七回詩歌文学館賞の俳句部門に遠山陽子さんの『遠山陽子俳句集成』(素粒社)が受賞されました。

日本詩歌文学館がその年に出版された詩、短歌、俳句の三部門から選ぶもので、昨年第36回の俳句部門は宮坂静生氏の『草魂』でした。

遠山陽子さん「俳句四季大賞」を受賞

第二十一回俳句四季大賞に『遠山陽子俳句集成』所収の「輪舞曲」が受賞しました。『俳句四季』の出版元、東京四季出版が主催する俳句賞で二〇〇一年の設立。

谷村鯛夢さん新著出版

もつと俳句が好きになる

『俳句ちよつといひ話』

長年の編集者の経験から得た、著名人の俳句と句にまつわる様々なエピソードや、有名俳人、有名句のかくれた話など、はつとする「ちよつと」が満載です。

(紅書房・1500円+税)

第4回 俳句研究会

4月23日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 根岸操・秋山ふみ子・玉木康博・
戸川晟・飛永百合子・大森敦夫・

関 梓 参加者30名

★講話……水野星闇氏 「健吉と万太郎

『句歌歳時記』に見る万太郎句」

薫風へ投網のようにシーツ干す 永井 潮
轉りや笑ひすぎたる春キャベツ 関 梓
青葉若葉身体に浮力加わりぬ 松元 峯子
これからが本当の私花は葉に 戸川 晟
持て余す心の波や花うつぎ 吉村春風子
たんぽは咲いただらうかウクライナ 飛永百合子
本質はどこに玉葱むきにけり 根岸 操
ゆでこぼすパスタの匂ひ菜種梅雨 秋山ふみ子
人様に云へない動機遍路笠 稲吉 豊
あれくの会話もどかし日永かな 三浦 土火
乳飲み児預けお兄ちゃんの入学式 飯田 玉記
入学式手を挙げて渡る父母祖父母 淵田 芥門
早起きや雨戸開ければ春がゐた 大森 敦夫
桜餅を供え無心の般若経 石原 俊彦
たらちねの母をおもえば燕くる 佐々木克子
古池の水面くろぐろ蚪蚪の群 長澤 義雄
傍観を咎めるごとし春嵐 山本ひまわり
花冷や^{かきうし}と^{うし}の一字 石橋いろり
花は葉に行きと帰りはちがう道 前田 光枝

第5回 俳句研究会

古書捨てて書店の遠し大ぶぐり 野口 佐松
甘咬みをまだ許されて初桜 依田しず子
冴返る夜は一畝の清水水 水野 星闇
花みずき駅まで続く通勤路 根岸 敏三
エスカレータ私と花びら乗せて行く 宮腰 秀子
春灯こころの澱も流れけり 西前 千恵
断捨離を始め蛙の目借時 満田 光生
砲身に桜蕊降る雨もまた 大槻 正茂
花みずき頭上の空氣からやかに 山崎せつ子
鳥飛ばずマリウボリの春地下の人 玉木 康博
花水木今来た道を引き返し 前田 弘

5月28日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 根岸敏三・秋山ふみ子・
玉木康博・山崎せつ子・
石橋いろり・大森敦夫・
戸川晟・水野星闇 参加者33名

★講話……前田 弘氏

「鈴木石夫全句集『裏山に名前
がなくて』を読む」

誰からも離れていたい白日傘 門野ミキ子
筍のまだ生きてゐる重さかな 越前 春生
覚えなから忘れな過ぎし 前田 弘
ラムネ飲むあの音この音転がして 水落 清子
春が逝く一切合切そのままに 永井 潮
どくだみの団結力に惚れました 前田 光枝

海は今紺の静けさ夏はじめ 三浦 土火
青時雨光こぼして鷺の佇つ 石橋いろり
冷酒酌む父の知らざる齡生き 吉村春風子
生垣に一筆書きの「薔薇どうぞ」 宮腰 秀子
真ん中はまとも蚕豆の三兄弟 稲吉 豊
柿若葉すこし濃い目の茶をいれる 山崎せつ子
朝顔に名前をつけし「元気くん」 根岸 操
独り酌む葉桜の夜は人肌爛 淵田 芥門
のらぼう菜多摩の横山見て育つ 飛永百合子
雲の峰町は名前を二度替へて 大森 敦夫
寝ねがてに父母の声聞く籠枕 水野 星闇
吊皮に逞しき腕更衣 戸川 晟
頬杖の指にしめりや蝸牛 松元 峯子
人類の立ち位置見えぬ青葉闇 依田しず子
堀際の八重のどくだみ白の濃き 山本ひまわり
青甘蔗の道自転車道を港まで 満田 光生
雨上る町に乱舞の夏つばめ 亀津ひのとり
まるまると育児順調鯉のぼり 飯田 玉記
飛び乗りてひと時扇薄暑かな 石原 俊彦
鬼灯や花を落としてまだ緑 根岸 敏三
夕照へ羽搏くしづき通し鴨 長澤 義雄
万緑の中リフトで降る高尾山 西前 千恵
B円統治御高配の果てチャンプルー 櫻本 愚草
肩先をかすめて駅の夏燕 秋山ふみ子
和菓子屋の紺のれんや街薄暑 佐々木克子
聖五月なんじゃもんじゃは風の中 関 梓
白つつじドレスに映えて笑みの新婦 玉木 康博

事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます
「現代俳句協会」を探索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「都多摩」へと進んでください。

★第40回多摩地区俳句大会

日時 令和4年11月5日(土)
会場 武蔵野シンクホール(JR武蔵境駅北口)
投句 二句一組 千円(何組でも可)
締切 令和4年9月9日(金)
(詳細は別紙をご覧ください)

★秋の吟行会

日時 令和4年10月1日(土)
会場 府中市郷土の森博物館
交通 分倍河原駅よりバス8分、
JR府中本町駅より徒歩20分
(詳細は別紙をご覧ください)

★会員の現況(6月末現在)

238名(正会員192名・一般会員46名)
☆新入会員 4名(敬称略) *印は正会員
*南万七宿(国分寺市) *篠遠早紀(小平市)
*下田峰雄(小平市) 佐々木 凜(松山市)
◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料(申し込み手続き不要)。それ以外の方は年会費2千円です。お問合せ、ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

「多摩のあけぼの」編集担当幹事

関 梓(梓) 満田 光生(光)
飛永百合子(百) 山崎せつ子(せ)
永井 潮(潮)

ご案内

俳句研究会

第8回 中止いたします。

(感染急拡大のため)
第9回 9月24日(土) 午後1時
立川市子ども未来センター

立川駅南口徒歩13分
(とじ込みはがきの地図参照)
電話042・529・8682

*講話 戸川晟氏

第10回 10月15日(土) 午後1時
立川市子ども未来センター

*講話 山本ひまわり氏

○感染防止を心掛け、体調不良(発熱等)の場合は積極的にお休みください。お出かけ前の検温とマスクの着用をお願いします。

〈在宅句会〉(投句参加)

▽開催日の一週間前までに投句してください。
▽出句は一人三句です。(選句はありません)
▽20×3cm程の短冊に一句ずつ書いてください。
▽参加費は千円です。(出句時にお送りください)
▽句会終了後、全作品の得点入り清記用紙と高点句、出句された作品の成績、寸評等を取りポートとしてお送りします。

(投句先) 〒180-0006

武蔵野市中町3-29-19

蓮見 徳郎方「俳句研究会」投句係宛

編集後記

☆会員現況欄に新しいお名前を見る事は嬉しい。多摩地区の句会に参加してから八年になります。会報と句会で友達ができて嬉しいです。(梓)
☆私の所属結社の例会は、未だ半数が欠席投句「遠出が怖い」人が多い。対面だからこそニュアンスが伝わり、失うものは多いのだが。(光)
☆庭の紫陽花が梅雨空に向かって藍色の歌を響かせている。亡き師、鈴木石夫は「紫陽花の穂の重さは手ではかる」と詠んだ。(百)
☆老鶯と時鳥を聞きながら新緑を見られるとてもいい季節です。ちよつと汗ばみながら辺りを犬と散歩するのはとても気持ちがいい。(せ)
☆日本は世界一の長寿国で平均寿命は男女共80歳を優に超え、健康上問題なく生活できる健康寿命もすごい。さて、俳句寿命はどうだろうか。多少健康を損ねても俳句は作れる。日頃から好奇心を養い、俳句寿命を延ばし続けたい。(潮)
―題字は三橋敏雄氏―

令和四年七月二十八日発行

発行人 吉村春風子
編集人 永井 潮
発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局
〒181-0015
三鷹市大沢2-10-7

大森敦夫方

TEL 090-9389-4821
FAX 0422-3010934
印刷所 株式会社 清水工房
TEL 042-62002626